

Title	西田幾多郎の行為の哲学(Digest_要約)
Author(s)	太田, 裕信
Citation	京都大学
Issue Date	2016-11-24
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k20041
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

西田幾多郎の行為の哲学

太田裕信

1 問題設定

西田幾多郎の哲学はどのような意義をもっているだろうか。従来の研究において、その意義は「純粋経験」や「絶対無の場所」という概念を軸に、「宗教」や「場所的論理」という新たな論理（存在論・認識論）に求められてきた。ただし、後年の西田は自らの哲学を「行為」の哲学として提示している。従来の研究では、初期の「純粋経験」や「絶対無の場所」という概念を強調するあまりに、この「行為」の哲学が十分に論じられてこなかった。しかし、西田哲学の本質と今日の哲学におけるその意義は、この「行為」の哲学からこそ見て取られるのではないか。

西田の「行為」概念（後に「行為的直観」という概念となる）のもっとも基本的な特徴は、単に特定の目的意識をもった意志的行動ではなく、世界に生きる自己のあり方を示す存在論的概念であるということである。それゆえ「行為」は、理論と実践の対立で言えば実践の意味を強くもつが、単に理論と対立した実践ではなく、その区別以前のわれわれの日常のあり方を示す概念である。

本博士論文は、この西田の「行為」概念の形成と展開を辿り、その哲学の本質を明らかにするものである。ただし、本稿は単なる西田の「行為」概念の形成過程の概説にとどまるつもりもない。それを辿りつつも、とりわけ（今述べたように、西田の「行為」は理論と実践の対立以前の存在論的概念なのだが）その「実践哲学」的側面に焦点を当ててみたい。そして、そこから多くの場合西田の本質と捉えられる「宗教」の問題も考えるものである。

西田の「行為」の哲学は、いわゆる社会学的考察や政治学的考察ではないし、今日的で具体的な倫理的問題を扱う考察でももちろんない。それはあくまで「行為的自己」とそれが生きる「世界」の存在論である。ただし、そこには、人間の根源的な位相を見つめた上での実践をめぐる思考が提示されていると言えるのではないか。西田哲学は、単なる宗教哲学や「場所的論理」と呼ばれる新たな論理を提示した哲学にとどまるものではなく、根源的な位相における実践哲学として見ることもできるのではないか。その暁には、西田を今日の時代を哲学するための材料として開放できるのではないか。そうした西田哲学を材料とすれば、現代という歴史的世界に実現されうる宗教性を本質的に考えられるのではないか。本稿はそのような視座に立って書かれている。

この西田の「行為」の哲学を明らかにするために、本稿は西田哲学の通時的展開を、「直観期」と「行為期」

という独自の区分をもって整理する。概して従来の研究は、西田哲学の展開を「前期」、「中期」、「後期」の三つの時期に区分している。しかし、「行為」という観点から西田哲学の展開を見るならば、われわれは、ともに中期に属する『一般者の自覚的体系』と『無の自覚的限定』とのあいだに、ある変化に気づく。というのは、『善の研究』から『一般者の自覚的体系』までは「純粹経験」など広義の「直観」が最重要概念として用いられているに対して、『無の自覚的限定』においては、「行為」の概念が西田哲学の中心に据え始められているからである。そのため本稿では、西田自身が用いた言葉ではないが、『一般者の自覚的体系』までの思想を「直観期」、『無の自覚的限定』以降の哲学を「行為期」と便宜的に呼ぶことにする。

直観期

前期 『善の研究』（1911 年）から『芸術と道徳』（1923 年）までの著作

中期 『働くものから見るものへ』（1927 年）、『一般者の自覚的体系』（1930 年）

行為期

『無の自覚的限定』（1932 年）

後期 『哲学の根本問題（行為の世界）』（1933 年）から『哲学論文集第七』（1946 年）までの著作

本稿では、この「行為期」の著作群が主題的に扱われる。

2 内容の概観

各章の概略とそれらの連関を記しておく。

第1章 行為の弁証法——「事実」概念をめぐる直観期から行為期への展開

西田の「行為」の哲学の形成において重要な位置を占めるのが、田辺元の有名な論文「西田先生の教を仰ぐ」（1930 年）である。田辺はこの論文で、『一般者の自覚的体系』における西田哲学を「発出論」的な観想的体系として批判し、西田は『無の自覚的限定』の主に第三論文「私の絶対無の自覚的限定といふもの」で、この批判に応え「行為」や「弁証法」を自らの哲学の中心概念とすることになる。第1章では、この田辺の批判を介した「直観期」から「行為期」への展開を問題とする。

その展開を問題とするときに注目されるのは、『善の研究』以来用いられる「事実」という概念の位置づけの変容である。従来の西田論では田辺の批判はよく取り上げられ、最近の研究では西田の応答も跡づけられている。ただし、西田の「行為」概念の形成に注目した場合、より詳細な論究が可能であり、それによってこそ、

後の西田哲学の基盤となるこの時期の「行為」概念の特徴が明らかになるのである。

第1章では概ね次のようなことが明らかになる。田辺の批判を介して形成された「行為」概念の特徴は、経験の発展性、連続性に重きを置く「直観」に対して、その発展を切断する「非合理」的な「事実」を介した自己形成の意味をもつ。そしてこの「行為」概念の論理はまさに非合理と合理の媒介として「弁証法」として提示されることになる。ただし、この「弁証法」は、多様なものの一元化に傾く有機体的（発出論的）なヘーゲルの観想的な弁証法に対して、あくまで観念化されない質料的な「事実」と、全体化に抗するその都度の「自由」の意味を強くもつ「行為の弁証法」なのである。

第2章 非連続の連続——「永遠の今の自己限定」と「私と汝」

田辺への応答以降の西田は、この「行為」概念を、「永遠の今の自己限定」という時間をめぐる思想と、「私と汝」という他性をめぐる思想の形成を通じて、より具体的なものとしていったが、この二つの思想は「非連続の連続」という概念に総合されることになる。第2章では、西田の「行為」の哲学の中核を占める「非連続の連続」の内容と意義を論じる。近年の研究では、とりわけ「永遠の今」や「瞬間」という概念の内容とその意義が論じられつつある。これに対して、本章は「瞬間」の概念をもう一度考え直すとともに、「非連続の連続」という概念が示す「行為」的な性格に注目する。

第2章では概ね次のようなことが明らかになる。「行為」は、時間論的には、非合理的な深みを蔵した垂直の現在（永遠の今）を根底に成立する。そのもっとも実存的に究極的な経験は、決断的な姿勢をとりながら、その果てに既知の連続性を断ち切る「事実」ないし「汝」を媒介とし、自己を新たに自覚する充実した現在として「瞬間」と呼ばれる。自己の自己同一性とは、多くの他者（汝）との関わりにおいて、過去（汝）と対話し、未来（汝）へと飛躍するという複層的な物語的自己形成によって「非連続の連続」的に、すなわち「行為」的に自覚されるものである。

第3章 歴史的な存在論——「表現」およびマルクスとの関わりを中心に

第3章では後期の歴史的世界の論理を問題とする。従来の西田論では、この歴史的世界の存在論も多く論じられているが、西田が図式的に反復する「絶対矛盾的自己同一」という外面的な「論理」の整理や、その形成にあたっていくらかの影響を与えた田辺元の「種の論理」との対決という議論に終始しており、結局のところ、西田の歴史的世界の論理がどのようなかたちで、われわれが生きる世界のあり方を浮き彫りにするものであるのかが決して明瞭ではない。

そこで本稿は、この歴史的世界の存在論の意義を、「表現」概念とマルクスとの関わりに注目することによって考えてみたい。というのも、歴史的世界の「表現的世界」とも言われ「表現」概念からその本質が規定さ

れるとともに、その存在論の具体的内容は、マルクス主義とは区別された限りでのマルクス哲学との関わりからもっとも明確に理解できると考えられるからである。

第3章では概ね次のようなことが明らかになる。歴史的世界の論理は、多数の個物間の、そして個物と世界との間の「表現」的な関係論的構造を基盤とした未決定な潜在的な力としての「歴史的形成作用」の「創造」の論理として提示される。それは、マルクスの言う「自然史的過程」に通ずる「歴史的な自然」の論理である（この点を重要視して、本章のタイトルは「歴史的な自然の存在論」とした）。この存在論においては、国家・民族も「歴史的な自然」の「形」としての「生産様式」の意義をもつものとして理解される。後期の重要概念である「行為的直観」は、そうした「歴史的な自然」において表現され（疎外・物象化され）た「物」を媒介としながら、世界と物を形成する経験概念である。これらのことから、西田の歴史的世界の存在論が、マルクス主義とは異なりながらも、「創造」的な唯物論的（歴史的物質的・歴史的自然的）性格をもつことが明らかになる。

第4章 実践と宗教——自己矛盾的存在としての罪をめぐる

このように『無の自覚的限定』以降、西田は「行為」概念を自らの哲学の中心に据えていくのだが、その一方で西田哲学は初期から晩年に至るまで一貫して宗教と密接に関わるものであった。田辺などの同時代の哲学者は、そうした西田の宗教的性格を根拠に、その哲学を非実践的なものと批判するのだが、「行為期」の西田はこうした批判を意識して、「行為（行為的直観）」に基づいた実践哲学と宗教哲学を形成することになるのである。第4章では、実践哲学に関する著作『哲学論文集第四』（1941年）を主な手がかりに、西田の実践哲学と宗教哲学を統一的に考える。

そこで手がかりとなるのは、西田が実践哲学を論じるにあたって拠り所としたキルケゴールの『死に至る病』の「罪」の思想である。そして西田の宗教哲学も本質的に、この「罪」の思想を起点に考えられている。この「罪」という実践哲学と宗教哲学の共通の根源から、西田の実践および宗教の思想を見直したい。従来の研究では、西田の実践哲学は西田哲学の弱点として見られる向きがあり、西田が実践哲学を考えるにあたって重視した人間の自己矛盾的な「罪」の意味が哲学的に論じられてこなかった。また、西田の宗教哲学は、禅や浄土真宗、キリスト教という個別宗教との関わりから主に論じられてきたが、その際どうしても「実践」から切り離して西田のいう「宗教」を考察する向きが強い。しかし、晩年の西田において、実践と宗教は統一的に理解されなければならない。

第4章では概ね次のことが明らかになる。行為的自己はその根源的な位相において「宗教的」である。というのも、行為的自己は、さまざまな他なるものとの関わりにおいて生きる世界内存在であって、本質的にそれらと不調和な自己関係の可能性を孕むものとして「罪」であり、その「罪」の自覚が人間の宗教性の根源だからである。行為的自己は、それを自覚するときに、その都度の自らの状況を、そこに使命・課題を見出しうる

偶然的・必然的な「運命」（絶対表現）として受け取り直し、世界に実践的に働きかけていく。また宗教経験は、単なる内面への沈潜によって到達されるのではなく、あくまで「罪」の自覚をふまえた運命的使命（神の言葉）の引き受けや「罪」の自覚をふまえた祈りの言葉（名号）を媒介とする。そこで、行為的自己はその断絶的に起こる「転換」を経て、「歴史的自然」の世界への実践行為に再び向かう。その宗教性は「大地」に根ざす「靈性」の意義をもつ。

補章 西田の行為の哲学とハイデガー

補章においては、第1章から第4章までの論述を踏まえて、従来の研究において西田と最も親近性をもつ哲学の一つとして認知されるとともに、西田が「行為」の哲学を形成するときに批判的に言及を行ったハイデガーとの関わりに注目する。

両者の差異は、従来の研究でも指摘されてきたように、ハイデガーが将来に優位を置くのに対して、西田が垂直的な現在に優位を置くところに明瞭に表われる。この補章は、その時間概念の差異をもう一度考え直すとともに、「運命」をめぐる両者の差異にも注目し、それらの差異の意味を西田と同趣旨のハイデガー批判を行った九鬼周造の偶然性の哲学を援用しながら考える。

補章からは概ね次のことが明らかになる。西田の「行為」概念は、ハイデガーの可能性・将来優位に対して、九鬼周造とともに、垂直的な深みをもった現在の偶然性に優位を置くものである。そして、その「実践哲学」は、すべてが有用性や生産の観点から見られる世界に対して、有用性の連鎖に尽くされない「事実」や「物」をいたわり、個と世界が調和する表現的世界を理念とすることにおいて、後年のハイデガーの「四方界」の思想とも通じ合う。

3 結論

西田の「行為（行為的直観）」とは、単なる主観的な意志行為ではなく、どこまでも観念化を拒む質料的な「事実」、あるいは連続的な生に亀裂を入れる多様な他なる「汝」との邂逅に基盤を置き、「罪」を負って「歴史的自然」の世界にポイエシス的に働きかける人間の普遍的な経験概念である。それは時間論的には、起源（過去）も目的（未来）ももたない垂直的な深みをもった現在（永遠の今・絶対無の場所）を中心とする。現代世界における西田哲学の可能性の中心は、こうした宗教的な深みに根ざしながら現実の世界と自己を問題とした「行為」の哲学に見られるのではないかと問いかけて本稿は締めくくられる。